



「菅井貴子と学ぶ 北海道の天気と防災」

菅井貴子 著
北海道新聞社，2023年3月
192頁，1,760円（税込）
ISBN 978-4-86721-089-5

「こだまでせうか，いいえ，誰でも」テレビ・コマーシャルが反響したあの日，自然に対する畏怖の念を抱かせ，数多の被害者に心痛める．連鎖する災害に我が身を案じ，家族を案じ，社会を案じ，国家を案じ，あれから12年，東日本大震災の追悼の日に本書は出版された．

難しい，難しいのだ．気象学における災害の扱いは難しい．理系学問である以上，心象描写は埒外にある．かといって，理屈や数値の羅列では，防災の用をなさない．自然の摂理をたずね，対応の策を説く．金子みすゞの詩に言葉の力があるのなら，「情報と知識が命を救う」と語る本書にもまた言葉の力が宿っていよう．

短い，短いのだ．本書は2章構成，天気は138頁，防災に45頁．一見，不釣り合いにみえる構成に賛意を示したい．防災は簡潔明晰に，最善策を述べるのが良い．そうでないと「いざ」というときに役に立たない．車が吹雪で立ち往生したら，どうする？「原則エンジンを切る」まで3行．車のまわりを除雪するイラストがあって，あとは待機しなさい，そもそも無理して外出するな，と，吹雪頻発域の住民には常識だが，人口膾炙とは言い難い．実際に痛ましい事故があった．52頁

の天気図と111頁のコラムに著者の無念が伝わる．

暑い，暑いのだ．気候変動の影響もいよいよ顕在化しつつある．東京五輪のマラソン・競歩競技は札幌で実施されたが，皮肉にもその期間，東京より高温だった．気密性の高い住宅と冷房機器の未設置により熱中症リスクは意外に高い．暑熱環境をハザードと認識し，11節立ての第1章「北海道の天気を知ろう」の末尾に添えたあたり，著者の見識を感じる．

詳しい，詳しいのだ．本書いたるところ定量表現で読者の理解を促進する．「台風の年間発生数は平均25.1個，そのうち接近・上陸するのは14.7個，さらに北海道への接近は1.9個」の調子だ．一方，入念な調査による丁寧な記述も秀逸だ．死者1000名超，洞爺丸事故は台風の苦い経験として語り継がれている．時々刻々の気象状況と航行判断，70年以上前の出来事がありありと目に浮かぶ．

新しい，新しいのだ．「雨を監視する」の項目で，既存の気象レーダの説明があれば十分なところ，雲粒子ビデオゾンデの開発やら，台風上空からのドロップゾンデ観測やら，フェーズドアレイレーダの試作やら，著者の気象学への期待が窺える．

速い，速いのだ．著者は一昨年にも出版したばかり，驚くほどの速筆だ．それも連日，気象キャスターとして出演しながら，そう思って，テレビをつけたら，こども向け新書を上梓したのだと．巻末，来訪者に対し「北海道に来てくれてありがとう」と締めくくる．その言葉は北海道の人々からこだまして著者に返っているに違いない．

（北海道大学 稲津 将）